

キャノン機関

畠山清行

キヤノン機関

畠山清行

はたけやま せいこう

島山 清行

北海道石狩町に生まれる。
千島産金、上鴻金鉱等の経営に参画。かたわら
文筆生活にはいる。
戦時中は情報局の宣伝関係に奉職。小説、史伝、
戦記等の著書20余冊。
最近の主な著書には「陸軍中野学校」(サンケ
イ新聞出版局)、「足もとにあるかもしれない宝
の話」(毎日新聞出版局)がある。

キャノン機関

1971年6月15日発行

定 価 540 円

著 者 島山清行◎

発行者 徳間康快

印刷所 金 羊 社

製本所 ナショナル製本

発行所 株式会社 徳間書店

東京都港区新橋4の10 郵便番号105
電話/433-6231 振替/東京44392

(乱丁・落丁本はおとりかえいたします)

0036-518387-5229

キ
ャ
ノ
ン
機
関
・
目
次

密偵と馬賊

深夜の卒業式	8
奇妙な結婚式	10
種つけ問答	12
壁に張られた『之靈』	14
還らざる旅	16
学校長に血書	17
天台宗極樂寺	22
ウシヤアボ 五家堡の老將軍	26
男の洗礼	30
だまし討ち	33
五洋匪団と取引	35
仏卦に導かれて	38
人馬一体の馬賊戦法	42

形勢逆転の迎撃戦	45
後新秋 カウシンチュウ の邂逅	48
帰順変転	50
とんだお客	55
誤解と誤解	57
死地に向かつて	61
裏切り	64
死刑の宣告	67
無人の喇嘛廟	71
野菊の草原で	76
関東軍の秘密指令	79
キャラバンの道	81
穴倉生活三ヵ月	83
着物製造器	87
参謀本部の西北工作	91
舌先三寸でまた生還	95

キャノン機関

鉄のカーテン	97
脱獄の夜	99
戦死を装って	104
日本労農学校	108
馬占山軍の賓客	110
国府のスパイに	113
二足のわらじ	118
親ソ派と土着派	123
暗殺計画に三案	126
西郊空港も着弾圏	130
駐日情報将校	134
占領政策でアカを育成	138
日本を包んだ黒い霧	142

謀報活動こそ戦力	145
郵船ビルへ軟禁	149
米軍輸送機で仙台に	151
四大新聞黙殺の真相	165
発狂した諜報員	169
マッカーサーの首の番	174
キャノン機関の誕生	177
拳銃が無二の道楽	178
弱体の米諜報機関	181
この世の極楽	183
眠気ざましが	188
共同の敵	190
流れついた黒山島	193
不敵な少尉	196
大韓民国仮政府	200
李承晩の目の上の瘤	201

寝室で狙撃	203
景武台機関	205
場所 は 日本領海	208
未来の陸軍総司令官	212
李香蘭スパイ説	215
中共のスパイ容疑	218
恋愛特急	222
FBIの秘密指令	225
テトラ型の釘	227
あとがき	

カバー絵・金森 達
イラスト・三井永一

密偵と馬賊

深夜の卒業式

満州事変の発端となった、奉天郊外の柳条溝で鉄道爆破事件があったのは、昭和六年九月十八日の夜である。この事件から三年後の昭和九年九月三十日。北満ハルビン郊外の一角で、異様な儀式がおこなわれていた。

ハルピンは、ロシアが第二のウラジオストクをめざし、満州への進出拠点として建設した街だから、市街の中心地にはギリシア正教式の寺院をはじめ、煉瓦づくりの高級住宅など、異国情緒のあふれた建物がならんでいる。その建物を左右にみて、大通りを進むと、ほとんど人家も絶えた郊外に、ロシア人墓地があった。墓地の手前、大通りの左側の、高い石垣をめぐらした一郭が、天台宗極楽寺である。

極楽寺は、本堂を中心に幾棟かの建物がたちならび、つねに数百人の修行僧がいて、北満への仏教伝導の基地となっていた。その建物は、おのおの廊下で結ばれていたが、おくまった左端のひとときわ大きな建物は、渡り廊下で直接本堂へつながり、特に許された僧侶以外の出入りを厳禁されていたのである。

儀式のおこなわれていたのはこの建物で、九月三十日も、すでに真夜中であつた。午前零時の僧坊は、深い眠りにおちこんでいたが、この建物だけは別で、百匆ロウソクのゆらぐ大広間に、墨染の衣をまとった百四十九名の青年僧が正座し、壁間の大日章旗を背にした、緒顔僧衣の偉丈夫の言葉に耳をかたむけている。

「諸子は、本日をもって、めでたく学業を終えた。かえりみれば三年有半、よくぞ困苦にたえぬいて

きた。しかし、その困苦欠乏は、今日をもって終わったのではない。

諸子はやがて、それぞれ赴任の途につくであろう。ほとんどは、外地に派遣されるだろうが、外地において検挙されれば『スパイ』あるいは『間諜』として、平時でも牢獄につながれ、戦時ならば銃殺、もしくは絞首刑をまぬがれないのである。諸子が、外国の官憲の手に捕われても、諜報要員はあくまでも秘密戦士であるから『日本が派遣したものだから返してくれ』という交渉は、国際信義上できない。外務省を通じての交渉がせいぜいで、まず『見殺し』となる。

諸子が勲功をたてても功績は世にしろれることなく、むくわれるところもほとんどない。考えるまでもなく、諸子のなさんとすることは、まことに割の合わない仕事なのである」

僧衣巨漢の底力のある声は、広間のすみずみまでしみとおるように流れてゆく。どこから迷いこんだのか、名もしれない虫の羽ばたくたびに灯火はゆれて、無気味な仏像の姿をうつしだしたが、青年僧たちは、しわぶきひとつする者もなくききいつている。

「諸子はいま、十九歳から二十歳の若者である。かがやかしい未来と、すぐれた才能をもっている。

諸子の才能と努力をもってすれば、大臣にも、大実業家にもなることができるであろう。しかしいま、祖国日本が求めているものは、大臣でも大実業家でもない。国の安全と発展を期するために、名利を求めず、一身をすてて、民族発展の礎石となる人物である。生死を超越して、悠久の大義に生きる。

日本人として、これほど立派な生き方はないが、諸子はいまこそ、その機会に恵まれたのである。

諸子のからだは、本日限り、おのれのものであって、おのれのものではない。上、天皇陛下に捧げ奉ったものなのである。したがって、自己の不注意による病みわずらいは、最大の不忠である。つねに、そのことを念頭において行動することをのぞんでやまない。なお、任地その他の詳細は、おつて

班長が指示する」

偉丈夫——訓練所長・岡田猛馬の訓辭は、それで終わった。ものみな寢靜まった深夜をえらんで、この異様な儀式も道理であった。これこそ、外国はもとより、日本人にもしられたくない、日本陸軍最初の極秘諜報要員養成機関『ハルピン訓練所』の、第三期生の卒業式だったのである。

奇妙な結婚式

卒業式が終わると、一番から百四十九番までの番号札が、各個にくばられた。中野五郎は、九番であつたが、

「こりゃア、なんだろう」

北海道出身の大高がきいた。大高は、同じ蒙古班の親友である。

「さア、多分、卒業の記念品でもくれるのだろう。それにしても、九番とはげんが悪い」

「九は苦につうずるか。縁起をかつぐなんて、中野、お前らしくもないぞ。なんなら、とりかえてやろうか」

「たのむ」

中野は、大高と番号札をとりかえた。

やがて、札をくばり終わった後藤蒙古班長は、全員に整列を命じた。後藤は、日露戦争の軍事探偵として活躍したのが自慢で、祝祭日にはかならず、往時着用した中国服を着る。その胸のあたりには、身分が露見しそうになって相手を刺し殺したという、返り血のあとがどす黒く残っていた。班長は、そのしみのある胸をそらせるようにして、

「かねがねいとうとおり、諸君はやがて国家百年の礎^{いすえ}として潔く散りゆく身である。しかし、国としては、第二第三の諸君を必要とするのである。また、諸君も、自らの志をつぐものをのこさないで世を去ることは、心残りであろう。よって、諸君が、いつ死んでも思い残しのないように、これから合同の結婚式をあげる」

と告げた。『結婚式』ときいて、だれもが意外そうな顔をしたが、

「万一、結婚相手が気に入らなくとも、気まま勝手な選択は許されない。なぜかならば、これは畏^{おそ}れ多くも天皇陛下の格別のご配慮によるものだからである」

班長の言葉が終わると、隣室との境のふすまが開いて、盛装した日本娘が百四十九人、一列縦隊ではいつてきた。大川ロシア班長の指示で、卒業生とならんで整列する。

「男子は右、女子は左。右、左向けーおい」

号令で、男女が向い合わせになった。

「各人、番号札を合わせてみろ。その合った番号同士が、良人であり、妻である。ひきつづいて、固めの杯事をとりおこなう」

各個に杯がくばられ、各班長が錫の銚子にはいった日本酒をついでまわる。杯事が終わると、一番の成績で卒業したロシア班の須崎が、生徒代表で『誓いの言葉』をのべるように指名された。須崎も勢いよく進みではしたが、突然のことなので言句に迷ったらしい。

「自分、いや自分らは、ありがたく、頂戴いたします。生涯を、ともにいたします」
きれぎれにいつて最敬礼した。

式が終わると、小豚の蒸焼がでて、祝宴があった。しかし、十六、七歳からの訓練所生活で、アル

コール類を口にしたことのない者がほとんどだから、一猪口か二猪口で杯を伏せると、たちまち祝宴も終わったのである。

宴が終わると、着なれた僧衣を中国服に着がえた卒業生は、たったいま結ばれたばかりの妻とともに、幾組かにわかれて極楽寺の門をでた。ハルピン市内に、ホテルが予約してあつて、そこで一週間の新婚生活を送るためである。

種つけ問答

ホテルでは、一組ごとにダブルベッド付の一室と、二百円ずつの小遣が支給された。外出も自由だったから、だれもがはいでいたが、二日目に訓練所の精神訓話の教官だった甘粕正彦*が巡視にきた。

「どうだ中野、種を仕込んだか」

「はい、まだであります」

「まだとは、どういうことだ。花嫁と、いっしょに寝ているのだろう」

「はい」

「じゃア、大丈夫だ」

と、教官は去っていった。あとで大高に、

「お前、甘粕教官になんていった」

ときくと、大高は、

「俺は仕込んだといったよ」

「本当に仕込んだのか」

「ばかだなア、そういわなきゃ点数が落ちるじゃないか」

と彼は笑った。そこで中野も、三日後に、甘粕教官がふたたび訪れたとき、

「仕込みました」

と答えると、教官は満足そうにうなずいて帰ったが、中野五郎は当時の心境を、

「われわれは訓練所で、植田將軍（生涯独身でとおしたので童貞將軍の異名があった植田謙吉中將）の話をよくきかされた。軍人は、いつか戦場に果てる身である。その際、後顧の憂いなく潔く死ぬために、生涯独身をとおしたという話です。だから、結婚といわれても、本当にはできなかった。それに『畏れ多くも陛下の思召しによるものだから、大切にしろ』と各班長から注意もあったし、うっかりすると、これもわれわれの女癖を調べる、試験のひとつではないかと考えた。また、われわれはみな、十六か七で満州に渡ると、そのまま訓練所にはいつて三年半、極楽寺から一步も外へでたことはない。なかには『裸になって、のっかればいいのだ』と、しったかぶりをするものもあったが、おそらく実際には女を経験していたものなど一人もいなかったらう。女のほうにしても同様で、私の妻なども、本籍は大分ですが、当時博多に住んでいた。父は青島の戦争で目を負傷した退役中尉の娘です。『国家のために命を捧げる立派な軍人の妻になるのだ』という呼びかけにおうじて志願した、予備役の真面目な軍人の家庭に育った娘ばかりでした。」

その上、佐世保に集合して『義は萬岳よりも重く、命は鴻毛よりも軽し』という教育までうけてきたのですから、一週間の同棲中に私がしたことといえ、彼女の名が『中山君江』で、退役軍人の娘であるというぐらいのものです。それよりも、ハルピンにいつて三年半、駅から岡田公館へゆく馬

車の中から市街をみただけで、どこもしらない。それがはじめて自由に歩くことを許されたのだから、市街見物の方が忙しくて、妻とはひとつベッドに寝たが、動いた拍子に手や足がふれると、互いにびくりとして手足をひっこめるといふ有様で、そのときはとうとうなんのこともなかった」と語っているのである。

* 甘粕正彦 大正十二年の関東大震災に憲兵大尉、渋谷憲兵分隊長兼麴町分隊長代理であった彼は、無政府主義者大杉栄、伊藤野枝らを殺した罪で退役。十年の刑となる。三年で仮出獄後、フランスに渡る。帰朝後、満州建国に参画。甘粕機関を率いて諜報活動のかたわら、満州国初代警務司長はじめ、軍関係事業の長を歴任。終戦に際し、満映社長として服毒自決す。

壁に張られた『之靈』

軍関係の機関でも、このハルピン訓練所ほど、秘匿工作の巧みだったものはない。それは、敗戦後二十余年を経た今日ですら、その内容にふれた記事が、一言半句も新聞雑誌に現われていない事実をみてもしれるが、その原因について、元甘粕機関員の松本守男氏は、

「ハルピン訓練所が、いつごろ発足したものか、私も知らない。いや、軍関係者でもその存在をしっていたものは、ごく少数ではないだろうか。それというのも、これが陸軍中野学校のように、軍が直接干与したものではなく、日清・日露の両戦役で活躍した軍事探偵や民間志士が中心の、いわゆる半官半民の組織だったからである。生徒は、予科士官学校の受験生のうち、背丈が小さいとか、軽度の近眼で体格検査ではねられた、堅実な家庭の二、三男の中から、愛国心の旺盛なものをよりすぐった写真諜報などのなかった当時、軍にとって最大の課題は『兵要地誌』の作製であった。それをつくる